



教職大学院 Newsletter

No. 8

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

08.12.26

教職大学院に期待する

福井県教育庁嶺南教育事務所 所長 大橋正博

2006年7月に中教審の答申で提言された教職大学院については、2007年4月1日付で制度として発足し、福井大学では、昨年度の設置申請を経て、今年度4月から実質的にスタートしています。

福井大学教職大学院の創設は、福井県の教育界にとって画期的な出来事であり、今後の学校教育の中核を担う人材・卓越したリーダー養成のための力強い原動力になるものと心から歓迎いたします。

これまでも、現職教員の福井大学及び各地の教育専科大学への派遣の実績がありますが、その成果が必ずしも学校現場における研究や実践に結びつかないくらいがあったように思われます。教職大学院は、福井大学におけるスクーリングに加えて、地域拠点や拠点校へ大学の先生が直接赴き、研究会や研修会に参加することで学校の教育活動も活性化され、ひいては地域の学校の教育力向上に波及効果が及ぶことも期待できます。嶺南教育事務所も教職大学院の発足に当たり、その理念に鑑みて、嶺南の教育の向上発展のため惜しみなく協力することを決めたわけです。

嶺南は県庁所在地から距離があり、教育の面でもハンディを負いがちです。特に、福井県における教員養成の拠点

とも言える福井大学を地元に擁する福井市近辺と比較すれば、意識や意欲の面でもその違いは大きいと考えられます。そのことから、嶺南地域の教育の振興のために高い理想と秀逸な教育理念、優れた現実感覚および教育技術を併せ持ったリーダーの養成は急務と考えます。福井大学教職大学院は、まさに嶺南のニーズにも合致するものであります。嶺南教育事務所としても、各市町教育委員会と連携し、嶺南地域から教職大学院へ有為の人材を送るべく努めるべきと考えているところです。

教職大学院が制度として発足して1年と9ヶ月、実際に大学院生を受け入れてまもなく1年となります。これまで順調に推移しているとはいえ、受け入れる側、送る側ともに、課題も少しずつ明らかになってきているように思われます。産みの苦しみとともに育ての苦しみを今後経験するものと思います。福井大学と県教育委員会および各市町教育委員会そして地域拠点や拠点校とが緊密に連携して教職大学院から多くの人材が輩出され、将来、福井県の児童生徒の「生きる力」「総合的な学力の向上」等に結実することを切に望むものです。

内容

教職大学院に期待する(1)

都留文科大学特色 GP フォーラム(6)

海外の学会から(8)

スタッフ紹介(10)

書評 『障害児心理学ものがたり I 小さな秩序系の記録』(11)

拠点校だより(2)

「開く」ことに関する「質の転換」(7)

高等教育機関としての「教師教育」の質保証を考える(9)

拠点校だより

『教員研修機関における研修の充実』を目指して

福井県教育研究所 主任 塚本康一

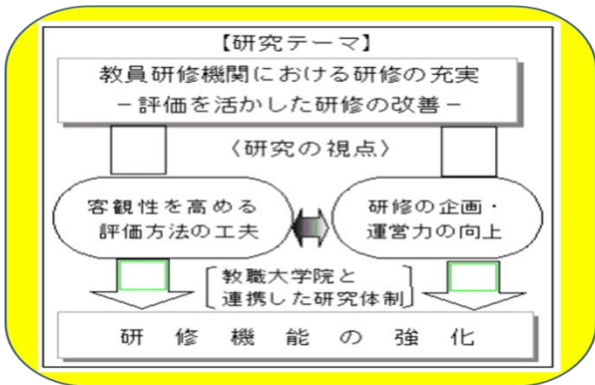
I はじめに

受講者アンケートに、「今日の研修内容をさっそく授業に活かしたい」、「講義や演習など充実していた」などの声が寄せられていた。忙しい中、真剣に受講されている教員のために、質の高い研修講座を実施しなければならないと痛感している。

そこで、4月から福井大学教職大学院と連携し、教員研修の充実を目指して取り組んできた「研修評価の工夫」や「研修の企画・運営力の向上」、「協働で進める研究体制づくり」について紹介する。

II 教員研修の充実を目指して

本年度、教育研究所では、教員の資質・能力の向上を図るため『教員研修機関における研修の充実』を全体研究テーマに掲げ、4月以降、これまでに10回の全体研究会を開催してきた。「効果的な研修方法についてよい情報交換ができた」、「研修の評価結果を分析し、研修の改善に役立てたい」など、全所員および教職大学院の先生方が活発に研究協議を積み重ね、着実にその成果が上がっている。



1 客観性を高める評価方法の工夫

(1) 「研修成果の活用状況アンケート」の実施

現在、研修成果の活用状況アンケートは全国の教員研修センターの約30%が実施している。研修直後に行われるアンケート結果に比べ、学校で研修がどう役立ったのか研修の効果測定を行う方が、研修に対して適切な評価をすることができる。そこで、先行研究や県外教員センターの事例

をもとに、研究プロジェクトチームや全体研究会等で検討し、研修成果の活用状況アンケート（以下 研修成果アンケート）を作成した。

まず、初任者研修においては、初任者の自己評価だけでなく、一部学校長による他者評価も行い、客観性を高めるために評価方法を工夫した。その後、専門研修・職務研修において研修成果アンケートを行い研修評価の対象を広げた。

(2) 「初任者研修における研修評価」の実施

初任者研修は教員研修の基本となる研修である。そこで、まず初任者研修から研修評価について分析すること



にした。第9回全体研究会（10月）では、7・8月に実施した初任者研修の研修成果アンケート結果をもとに、次年度の研修改善に向けた具体的方策について意見交換した。特に、学校長からは「事例研究や演習等の体験的な研修方法を取り入れてほしい」、「初任者が主体的に研修をする工夫はできないか」などの意見をいただきとても参考になった。所員や教職大学院の先生方で構成するグループで協議し、多面的な視点で初任者研修の成果と課題について話し合った。

(3) 「専門研修・職務研修における研修評価」の実施

7・8月の受講者に研修成果アンケートへの協力を依頼した。学校での活用状況について10月末までに約540名の受講者から回答があった。研修講座全体では、約90%の受講者が「研修成果を学校の教育活動に活かした」と答えていた。そのうち、専門研修全体の約65%が担当する授業に受講した研修内容・方法を実践するなど、「自分の教育活動に活用した」と答えていた。職務研修全体に

おいては約95%が「学校全体や自分の校務分掌などで研修成果を活用した」と答えていた。また、職務研修では成果が組織的に活用され、専門研修では個人の教育活動に活用されており、各研修の研修目標・内容等に応じた研修効果があったと考えられる。その他、研修講座への要望などの多くの意見が寄せられた。第10回全体研究会(12月)では、このような研修成果アンケートをもとに研究討議を行った。受講者の声を真摯に受け止め、研修の企画・立案に活かしていきたい。

(4) 研修改善サイクルの確立

第2回全体研究会(4月)では、教職大学院の寺岡教授から「プロセス評価は、学習者の学びの姿や行動変容を長期的に省察する評価方法。学習者の成長を評価することで指導・支援が効果的であったかを適切に評価できる」と講義をしていただいた。数値化をもとにしたPDCAサイクルの評価方法に加え、このプロセス評価を全体研究に取り入れた。

研修担当者が研修直後アンケートや研修成果アンケートをもとに、研修効果について検討した。さらに、全体研究会や担当課で検討を積み重ね、次年度の研修の企画・立案に活かした。このように長期間を通して行う研修改善サイクルにより、適切な評価ができたものとする。

2 研修の企画・運営力の向上

第4回全体研究会(5月)では、ポスターセッション討議法を活用し、『効果的な研修方法の工夫』について研究協議した。ポスターセッション討議法は、受講者が主体的に参加し、研修内容をより理解できるようになるなどの効果が期待できる新しい討議法・演習の一つである。

全体研究会の所員アンケートには、「この演習は、今度の研修講座に活用できる」、「事例発表後の研究協議として、この方法を実践したい」などの感想があった。ポスターセッション討議法は、所員にとって関心・意欲も高く、研修講座を運営する上で参考になったようだ。

その他、SWOT分析やKJ法を活用した演習など、多様な研修方法を全体研究会に取り入れてきた。これらの取組が、研修の企画・運営力の向上を図ることにつながることを願っている。

3 協働・同僚性を高める研究体制づくり

(1)各課の壁を越えた研究体制

研究を推進していくためには、その基盤となる研究体制

が肝要である。本年度、所長・副所長のリーダーシップのもと、所内に研究プロジェクトチームや研究推進委員会、研究推進担当課、全体研究会の組織を立ち上げた。各課の壁を越えた研究体制は、所全体の課題や具体的方策等について共有化し、協働研究を進める上でとても有効であった。また、企画案を各組織で検討するため、十分に練ることができた。研究体制が十分に機能することで、全体研究会を効果的に運営でき、研究内容を深めることができた。

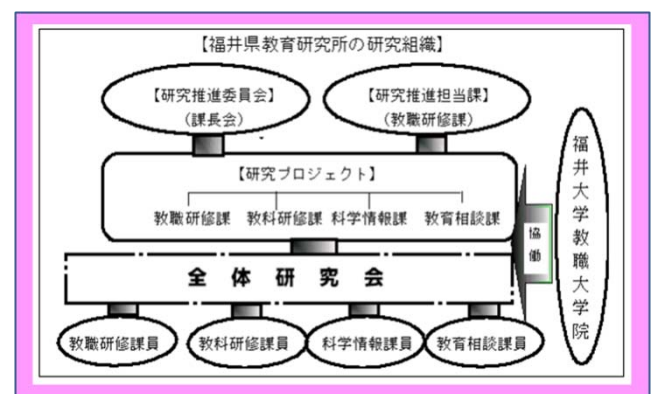
(2)教職大学院との連携

第2～5回全体研究会では、教職大学院の寺岡教授、淵本准教授、上野准教授、遠藤講師の各先生から『研修評価の改善』(プロセス評価)や『効果的な研修方法の工夫』などの講義・問題提起をしていただいた。さらに、研究プロジェクトにも参加していただき研究を深めた。教職大学院の専門的な立場からの指導・助言は、新たな発想を生み出したり、これまでの実践を再構築したりするなど、様々に刺激を受け、所員にとって効果的であった。教育研究所での現場において、教職大学院が提唱する「理論と実践との融合」を促進することができたのではないかと考えている。

(3)協働・同僚性の高まり

各課や小中高の校種、各専門教科、教職大学院など、それぞれの壁を超えた協議を全体研究会や研究プロジェクトチームで行ってきた。所員からは、「他課の研修講座の様子を聞くと、自分の担当の講座のヒントになった」、「小中高の教員が合同で意見交換ができるのが機会がよい」などの意見があった。

各課所員がもつ知恵やノウハウを共有し、学び合い高め合うこのシステムは、所全体の研修機能の向上につながっていったのではないだろうか。所内に協働・同僚性が高まっていると確かな手応えを感じている。



Ⅲ おわりに

『コミュニティ・オブ・プラクティス』（著者 エティエンヌ・ウェンガー他）には、自動車メーカーや石油会社など世界各国の企業で取り組んだ実践コミュニティの成功事例が書かれている。例えば、各部署の社員で構成するプロジェクトチームは企業の効率化を図るため、それぞれの仕事内容等を情報交換し、費用対効果を高めるための具体策を提案していく。企業にとってはコストダウン及び効率化を図ることができ、プロジェクトチームの役割はとてもし大きかったと書かれている。

教育研究所での研究プロジェクトチーム・全体研究会の

取組は、まさに企業の事例と同様ではないかと思う。また、このようにコミュニティを形成することができたのは、教職大学院の支援と教育研究所の各所員の良好な信頼関係や高い意欲が基盤となっていたからではないかと考えている。

教職大学院の拠点校としての取組はまだ始まったばかりであるが、学校現場のためにさらなる研修機能の向上を目指していきたい。

福井大学教育地域科学部附属小学校 第34回 教育研究集会をふり返って 研究テーマ つながり合って育つ 学びのプロセスを探る

スクールリーダー養成コース 稲津 公子（福井大学教育地域科学部附属小学校）

本校では、「生きる力」を育むために、つまり子ども一人一人が自立へと向かうために、必要なことは何かを探るために、様々なつながり合いの中にいる子どもたちを見つめていこうと考えた。そして今年度、「学びのプロセス」に焦点を当て研究を進めてきた。12月5日に研究集会を開き、公開授業と授業分科会とパネルディスカッションを多くの参観者に見ていただくことができた。

本校の教師は、低中高の部会を基本単位とし研究をしている。そして縦割り集団・全体と一教師が色々な集団の中で教師自身が自分が見取った子どものことや自分の思いを語り合い、教師自身が成長し、全員で子どもたちを見取

り生かし、全員で子どもたちを育てていこうとしているが、まだまだ模索中である。

私自身は、3年ほど前から低学年の子どもたちに興味を持ち、子どもたちを見つめてきた。今回は、造形科と生活科で授業を公開したが、授業を通しての気づきを参観者の方に語っていただくことで、造形科という教科で大切にしていけるべきことや、低学年の子どもたちの気づきの生かし方などを考える有意義な分科会をしていただくことができた。研究集会を終えた今、ご意見をいただけたことに感謝し、今回の授業分析をしているところである。

インターンの立場から研究集会に参加して

教職専門性開発コース 長田 陽佑（福井大学教育地域科学部附属小学校インターン）

研究集会が行われる前のある日、職員室で…。
中島先生「長田先生、バスケの動きでいい動きってどんなのがあるかな？」 長田「より確率よくシュートを決めるために、ゴール近く、つまり台形の中に動いてボールをもらうことですね。」 中島先生「なるほど。子どもたちにとってわかりやすい練習方法ある？」 長田「こんな練習方法どうですか？」 中島先生「ちょっと、子どもにとって難しいかな…。なら、こんなのはどう？」 長田「なるほど。いいですね！」
この話し合いから、子どもたちがどこに動けばいいか考

える授業案が出来上がった。私の専門がバスケットボールということもあるが、なにより、インターンという立場でありながら、私のことを信頼して下さり、一緒に試行錯誤して、一つの授業を作り上げることができたことを嬉しく思う。また、研究集会当日、様々な授業を通して子どもたち同士の「つながり合う」ことの大切さを実感できたが、私の中で最も印象に残っているのが、教師同士の協働することの素晴らしさ、つまり教師同士の「つながり合う」ことの大切さだ。研究集会という大事な行事に携われたこと、これまでのインターンの中でも印象深い出来事である。

教職専門性開発コース 鈴木 章史 (福井大学教育地域科学部附属小学校インターン)

私が学部生の時は、ただ研究大会に参加しただけで終わっていましたが、今回は一人の内部者として初めて研究大会に携わらせてもらいました。学部のと時の研究集会とインターンでの研究集会は全く別のものであった気がします。12月の研究大会へ向けて、先生方が何度も何度も部会や研究会を行われている事は全く知らず、インターン生になって初めて先生方の苦勞がわかりました。また学部の時には、授業の様子だけを見て考えるだけにとどまっていたの

が、今では研究の中身や主題に向かって研究をすすめている先生方の姿にまで考えることができるようになったのもインターンで附属小学校に入ったおかげだと思います。つながりあって育ったのは子どもだけでなく、附属小学校とつながった私自身も含まれているのかもしれない。私は授業をしたり、研究をすすめていたりしたわけではありませんが、少しでも研究に携われた事がいい経験となったと思います。ありがとうございました。

教職専門性開発コース 高山 星奈 (福井大学教育地域科学部附属小学校インターン)

当日参加するだけだった立場から一スタッフとして運営する立場になり、こんなにも大変だったのか！！と日々感じながら一ヶ月と当日を過ごした。

毎日子どもたちの様子を見ている私からすれば、当日の1時間だけしか見ないというのはやっぱりもったいないと思う。社会にしても算数にしても、授業の流れや普段の子どもの様子がわかっていて初めて深まるものではないだろうか。だからこそ、どの時間の授業を公開するのか、どんな授業にするのかが大切なのだが、相手が生きた授業だからなかなか授業者が考えているようにはいかない。そこがとても難しいなと感じた。

分科会で、「ある程度授業の流れや授業者の想いを聞かないと、子どもの学びがどのような位置づけになっているかわからない。」という意見があり、納得できる部分があった。なぜなら私自身も、「子どもの学びを見取る」と

いう視点は附属小学校に来て初めて学んだことで、最初は全くわからなかったからだ。しかし、インターンを通して少しはその重要性がわかるようになった。子どもの姿から見取することで、子どもの実態から離れない授業研究ができるのだと思う。教師の姿や展開から考えることも必要だが、その授業での子どもの姿から離れてしまうのではないだろうか。大切なのは、「今日の展開で子どもは何を学んだのか。こういう様子や、こんな学びがあった。だからこの後の展開は…」と子どもの学びを中心に授業を考えていくことで、それが「学びのプロセスを探る」研究なのではないかと今は考えている。

「子どもの学びを見取る」大切さを自分自身が振り返る研究集会になった。今後も、その視点について勉強していきたいと思う。

福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 公開研究会を終えて

スクールリーダー養成コース 酒井 晴美 (福井大学教育地域科学部附属特別支援学校)

11月19日、「自分らしく生きる学びの創造」をテーマにした4年研究の1年目である公開研究会が開かれました。本校が教育文化として日々実践している生活教育をベースとしながら、子どもたちが自分らしく成長し、自分らしく幸せに暮らしていくためにはどのような学びをしているだろうかということ、それぞれの学部の生活年齢に沿って、小学部は「あそび」、中学部は「くらし」、高等部は「仕事」を中心に、授業研究会と事例研究を行いました。当日は寒い日ではありましたが、多くの方に来ていただき

ました。ありがとうございました。その中で、子どもたちは落ち着いて活動していました。

中学部分科会では、参観者のお力を得て、授業の一場面から生徒の学びの道筋を広げていくことができました。また、実践者が「これいいよね」と感じて



いるその良さを伝えていくことの難しさも感じました。公開研究会では、参加して下さった方々から貴重なご意見をいただき、私たちに足りないこと、これからどうしていかなければならないかといったことに気づき、考え、前進する力となりました。今回の研究会には、教職大学院のおかげもあって、特別支援教育に直接関わっていない方の参

加もいただきました。このことは、特別支援教育の本来の目的に少し近づけたようで、うれしく思っています。また、本校に來ているインターンの木内さんが研究部に所属し、ともに研究を進めてきました。その実践を事例発表の中に取り入れられたこともよかったですと思います。

インターンの立場で11月19日の公開研究会に参加して

教職専門性開発コース 木内 彩乃（福井大学教育地域科学部附属特別支援学校インターン）

私は、4月から福井大学附属特別支援学校の高等部に、インターンとして週に3日ずつ通って来ました。そこで今回公開研究会が行われ、さまざまな分野の専門家の先生方が、助言者、協力者または参観者として来られ、意見交換会が行われました。幸運なことに私が主にかかわっている生徒が事例として取り上げられ、授業者の一人として、先生方に授業の様子を見ていただく機会にも恵まれました。

授業後の意見交換会では、私が日々かかわっている生徒の実態や支援の内容について、高等部の先生方が、改めて言葉にして説明されていました。さらに、他の学校の先生方との質疑応答を繰り返す中で、より広く深い視点から子どもについて語られていました。その内容は、まだまだ経

験の浅い私にもわかりやすく、言葉を通して今までの実践を共有でき、改めて子どもの本質や将来像を見る目を私の中に培う材料になったと思います。インターンとして学校に通い、これまで実践を積み重ねてきましたが、それをもう一度言葉で聞くこと、自分の中でも言葉にしていくことによって、再構成され整理ができていくのだということを感じました。

授業や意見交換会以外に、指導案の印刷や事例の検討会にまでかかわらせていただき、教師という職業の仕事の幅広さを捉える機会にもなったと思います。多くの先生方に支えられながら勉強できることに感謝を忘れず、これからも経験を積んでいきたいと思っています。

フィンランド、都留文と福井のジョイント

11月18-19日都留文科大学特色GPフォーラム

「地域を基盤にした教師教育改革—フィンランドと日本」開かれる

教職開発専攻長 寺岡 英男

この都留文科大学のフォーラムは、1日目が、フィンランド・オウル大学副学長の Pentti. Hakkarainen と Milda Bredikyte 夫妻の基調報告、2日目午前には福井大学教職大学院の寺岡、牧田が「『学びの共同体』づくりと『教職大学院』の発足」、都留文科大学の田中孝彦さんが「『子ども理解』の試みと教師教育改革の現在」を報告し、午後には総合討議という日程で行われた。

ハッカライネンは、PISAの結果を受けての教師教育研究について、特にナラティブな学習を中心にしたカナダ、アメリカ（マイケル・コール、人間認知比較研究所）と共同研究グループを立ち上げたところだという。言うまでもなく、フィンランドの教育はPISAでの「好成績」で注目を集めている。そうした結果を生み出す基盤には、「10

年目のプログラム」に代表される平等主義の徹底や民族や文化の多様性の尊重、生涯学習の保障、地方分権と学校や教師への権限委譲などの、先進的な教育改革の取り組みがある。

しかしハッカライネンは報告の中で、PISAの「好成績」とは裏腹に、子どもたちのモチベーションが低く、共同的な関係も十分ではないことを指摘した。これを改善していくためには、モチベーションを、ひいては人間性を高めていく学習が必要である。そうした場として、ナラティブな学習がある。知識は生活の中にあるのであり、子どもたちはそこから疑問をもち考えることのできる物語を必要としている。教師は、教科書の実事を与えるのではなく、子どもたちの思考を支える語り手としての力量が求められ

る、と言う。

オウル大学講師のミルダ夫人からは、そうした新しいアイデアと実践の試みの場として、オウル大学カヤーニキャンパスの遊びクラブで取組まれている、子どもたちの創造的な遊びに関わる学生・教師・保護者の参加する SIUMU Lab というプログラムが紹介された。3-6歳という幼児を対象とし、保護者も加わる点での違いこそあれ、省察的な実践の場としての福井の探求ネットを思い起こさせる。事実、このプログラムでは、子どもたちとの関わりはナラティブな学習に基づいて行われ、その活動の記録もナラティ

ブな記録が求められる。そうしたことを通して、理論とその応用としての実践という関係の転換や、学生の自発性や創造性の形成、異年齢の子どもたちのコミュニティがめざされる貴重な開かれた学習経験の場となっている。



「開く」ことに関する「質の転換」

教職大学院客員准教授 牧田 秀昭

「地域を基盤とした教師教育改革」の福井大学教職大学院拠点校の一事例として至民中学校の取組を簡単に紹介する機会を得た。特に今年度の移転開校ということもあって、モデル的に昨年度から大学と協働研究を進めていること、新しい学校は「時間」「空間」を著しく変化させたもので、「組織」と「記録」がそれを支えていることを報告した。授業改革が学校改革の核になっていること、生徒も教師も協働性が重視されていることに関心が集まっていたように思う。

フィンランドの報告では、必ずしも PISA で 1 位になったことに楽観視しているのではなく、むしろ子供の学習意欲は芳しくないことから、子供も学生もナラティブな学習を取り入れていること、都留文科大学の報告では、教育実践の全体的な力を培うために、Student Assistant Teacher の活動をベースにしたカンファレンスやゼミナール、論文作成などを含む長期的展望に立つ臨床教育学のカリキュラム構築など、リアルタイムでの方向性が示されて参考になった。

さて、このフォーラム全体を通じて、福井と同じ方向性を示していると感じたことがある。それは「開く」こと概念崩しについてである。「地域に開く」ことと「問いを開く」ことの両面で語られていたように思う。「地域に開く」ことは、学びの contents として、テキストに頼るのではなく、自分たちが生きている地域の文化活動や実際の生活などのリソースをいかに取り上げるかが重要だということである。動機付けも明確になり、多様な人材が関

わることで協働性も生まれ、その中で自己決定がなされていく活動が展開され、関わりの中でナラティブなストーリーテラーになり得る。さらに「問いを開く」ことについて、ミルダ・プレディクト氏の「答えが分からないことを若い世代に示し、一緒に考えていくことを進めていく必要がある」、田中孝彦氏の、「研究論文の効率的産出に目を奪われ、既成の概念や方法を安直に押しつけることは自戒すべき」などの発言に顕著に表れていた。「問い」を「問い」として返しながらかつ協働追求する中で、自己決定をアシストしていくというスタイルが求められているのであり、まさに福井の取組そのものであると感じたのである。

教育は元来開かれたものなのだろうが、「学級王国」という言葉でも明らかのように、実際の学校現場ではなかなか難しい。「授業公開」「学校公開」すら多大なエネルギーが必要になるし、教師が「分からない」とは言いづらいであろう。その要因は、教師が外部から評価(ランク付け)される、監視・管理されているという観念が支配していることによると思われる。既存の概念の枠を徐々に広げていくというマイナーチェンジではなく、「開く」ことにどれだけの意味があるかの捉え直しが重要であり、これが至民中学校の学校改革で狙っている「質の転換」であると考え

る。蛇足ながら、私の聞き方が不十分であったのかもしれないが、他の報告は個人的なものが主体で、組織的な改革の様子は伝わってこなかった。その点で福井の collaboration の仕組みは他に誇れるものであると感じた。

海外の学会から

石井 恭子（福井大学大学院／開発専攻）

8月18日から22日まで、GIREP2008（応用物理教育学会）に参加してきました。地中海に浮かぶ島国キプロスは、アフロディーテの誕生の地といわれる美しい海にかこまれ、世界遺産の宝庫とされています。

参加したワークショップを2つ紹介しながら、物理教育の新しい動向について考えてみたいと思います。

1：教師との対話で概念を構築する探究（Guided Inquiry）

ワシントン大学のリアン・マクデルモットは、探究的な物理プログラムを開発し、大学院生を中学校に派遣して実際に授業を行なっています。このプログラムでは、4人グループでの話し合いと実験が中心で、教師が各グループを回って、子どもたちにどのように声をかけるかが重要だと主張しています。リアンによれば、生徒がどれだけ理解しているかをみて、理解のレベルよりも少し上に行けるような問いかけをする、そうすると生徒がさらにその上に達するのだということでした。ヴィゴツキーの最近接領域に通じる考えですね。

リアンは、物理教育で重要なこととして以下の3つをあげています。

- ・概念を構築すること（constructing concepts）
- ・理由づける力を育てること（developing reasoning ability）
- ・物理法則を現実の世界と関連づけること（relating physics formalism to real world）

さらに、生徒の理解を助けるためには、数量問題を解く練習よりも、質的な理由付けを質問したり、言葉で説明させたりすることの方がよいと述べています。そして、その学習プログラムは、実際の中学校における実践と評価によって裏付けられています。

リアンは、これを導かれた探究（Guided Inquiry）と呼んでいます。探究は、子ども任せで自動的に行なわれるのではなく、教師が適切に問いかけ導くことによって、子どもたちが自分たちで概念を作り変えていくことができるのです。



2：グループで話し合う Minds-on プログラム

ヨーロッパ8カ国24チームの協同行なわれている電気教材開発のプロジェクト MOSEM のワークショップでは、4人グループ内で話し合いながら実験に取り組む、Minds-on のプログラムが紹介され体験することができました。

まずひとつの実験を4人グループみんなでやってみます。その結果を踏まえて、次に行なう実験の予想を4人で討論します。4人の意見をお互いに聞き合っ明らかになったら実験をしてみるのです。さらに、結果を見て討論します。ここでも、4人グループでの collaboration を重視しており、教師はグループのテーブルを回りながら声をかけていました。

開発者の先生は、生徒実験中心の Hands-on という考え方



に加え、Mind-on では実験の前に予想を話し合うことを重視していると話してくれました。Hands-on の要素は残しつつ、実験を通して自然の現象に向き合い、考えることを重視する立場として Minds-on という表現をすることが、MOSEM 開発者たちの主張であると感じました。

世界の科学教育では、探究（inquiry）や子どもの概念構築（construct concepts）、子どものことばを引き出す教師の役割という考えは当たり前になっており、多くの実践やカリキュラム開発が、学校を拠点に行なわれています。また、今回も、授業研究（Lesson Study）への関心が高く、質問を多く受けました。今、私たちが取り組んでいることとの共通点を多く感じる機会となりました。

高等教育機関としての「教師教育」の質保証を考える

東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター／教育目標・評価学会 共催シンポジウム

報告者：羽田貴史（東北大学）「高等教育の認証システムと教員養成機関」／佐藤千津（大東文化大学）「イギリスの教員養成の認証機構」／友野清文（日本私学教育研究所主任研究員）「私学教員の研修体系と質保証」／岩田康之（東京学芸大学）「国立・教員養成系大学から見た教員評価・認証評価」／司会：山崎準二（東京学芸大学）

本シンポジウムの趣旨は、高等教育機関として保証すべき教師教育の質、その保障を可能にするシステムの在り方について理論的に分析するとともに、外国の実態や日本国内での異なる機関での実態を検討することにあります。ここでは、報告者の報告そのものよりも、フロアとの議論について書くことにします。

一人目の羽田氏は、認証評価を担う立場から、まず政策の成り立ちについて、事後評価強化の方策としての認証評価は大学設置基準の緩和とセットになったものであり規制緩和による質の低下の防止策というマッチポンプ的な政策の組み合わせという説明がありました。このような背景があるため、多くの大学の自己評価が機能していない点が指摘され、認証評価を強化することと認証評価を評価するシステムの必要性が訴えられました。二人目の佐藤氏からは、イギリスの教員養成のプロフェッショナル・スタンダードとスタンダードを管理する方策について説明がありました。三人目の友野氏は、日本私学教育研究所主任研究員という立場から、私立学校の教員研修の体系について報告しました。四人目の岩田氏は、国立の教員養成系大学という立場から認証評価を検討し、「開放制」を前提とした質保証は限界があることを述べました。

本シンポジウムの後半に行われたフロアとの議論は多岐に渡りましたが、報告者ごとにひとつずつ論点を挙げると、まず羽田氏に対しては、認証評価の負担と形骸化を防ぐにはどのような方略があるのか、また実態が「わかる」とはどの程度のことを指すのかという点について疑問が出されました。これに対して羽田氏は、訪問調査をする必要性を述べ、それは2日程度かけてたとえば「小人数指導」など書いてあることを実施しているかどうかという条件整備のレベルを把握すれば十分である。もともとの認証評価はプロセスを評価するものであり、因果関係がわからないまま教師の能力に焦点化して評価してもほとんど意味はなく、まずは教育環境の条件整備が必要であると強調しました。

八田 幸恵（福井大学大学院／学校教育専攻）

佐藤氏に対しては、プロフェッショナル・スタンダード策定の手続きについての質問と、プロフェッショナル・スタンダードの中に教育実習や教科専門はどのように位置づけているのかという質問が出ました。これに対しては、イギリスのプロフェッショナル・スタンダードの策定には教員組合が深く関わっており一般の人が意見を言う機会もあること、実習先での質保証は重要になること、教員資格を取るためには教科専門のテストに合格する必要があるため教科専門の知識に欠ける教師がいるというわけではないということ、またそれらの前提として日本よりもはるかに目的養成のシステムであり、教員養成に関わるメンバーが当事者意識を持っており査察をプロフェッショナル・ダイアログとしてとらえているという回答でした。

友野氏に対しては、受講者のニーズから生まれてきている研修内容についての質問がありました。

岩田氏に対しては、現状の日本の制度は問題点を含んでいる点を踏まえつつもこの制度下において質保証をどのように考えるのかという質問が出されました。これに対して岩田氏は、戦前のように教科専門の知識をチェックすることで免許を付与するのは現代においては無理であり、教師特有の資質を身につけるため、日本教育大学協会が「体験」と「省察」をコアに持つ「モデル・コア・カリキュラム」を作成した。しかし、たとえば「省察」とは何かという点についても合意があるわけではなく、教員養成を担う大学が連帯し組織的な団結の中で相互に評価していく仕掛けが必要であると述べました。最後に、全員の報告とフロアとの議論を踏まえて、授業以外に生徒指導などの仕事が多い東アジアの教師という実態を踏まえてプロフェッショナル・スタンダードを構築する必要性、しかし、大学ができること／できないこと／できるけれどもしなくいいことに自覚的である必要性が主張され、シンポジウムが締めくくられました。

*この一文は、教育目標・評価学会のニューズレターに掲載されるものを簡略化したものであり、それについては教育目標・評価学会の承諾を得ています。

Staff 紹介⑦

松田 泰俊 まつだ やすとし

歩み

一切即一

信州はこれから激冬に入るというのに、私がお預かりしている寺の日だまりの福寿草が咲きだした。

福寿草にはほとんど蜜が無いという。それなのに時に虫たちが尋ねることがある。それは、パラボラアンテナのような形をして、太陽に向かって開いた花の中の極く僅かな温かさを戴きにやって来るのだという。虫たちは、温かさを戴きながら受粉の手助けをする。福寿草と虫たちは別々の存在だが一つの存在。正に一切即一の世界。教えるとおもわれている子どもたちから逆に教えられることの多い子どもと教師。その関係もまた一切即一の世界。一切即一の世界の中で初めて子どもたちは生き生きと輝き学ぶ。

新任の地で

私の初任地は栃木県葛生町（現在は佐野市）にある学校法人葛生高等学校。寺岡先生の故郷もこのお近くとお聞きした。何か不思議なご縁を思う。

ここで2年間日本史と倫理社会を教えた。教え子の中に桑原君という好青年がいた。新米教師の拙い授業であったのに何時も真摯にノートを取り、授業が終わるとよく質問に来た。求めて学ぶ桑原君こそ教師になって欲しい。そう思いそのことを勧めた。しかし、家庭が進学を許す状況になかった。それでも諦められず自宅から進学できる短大の夜間部を勧めた。自宅を尋ね親御さんにも勧めた。桑原君は、アルバイトをしながら熱心に学んだ。そして念願適って埼玉県の小学校の教師になった。やがて授業実践が認められ指導主事になり校長になった。そのことは目的ではないが、絶えざる研鑽の結果である。

子どもが動く

長野に帰って小学校の教師になった。まだ若かったので教科係は体育の担当を戴いた。主任が白石先生。ある時、先生は免許が社会科なのに何故体育を専門としているのかお聞きした。「先生方が算数や国語などの教科より下に見ているから。」と語って下さった。ハッとした。

白石先生の授業を見せてもらった。子どもたちは、器具室にある全ての体育器具を体育館に出し、相談しながら並べた。そして、平均台を渡り、マット上で転がり、跳び箱を飛び越えと、喜々として遊びだした。しばらくすると置き方や順序を変える等の工夫を加え、運動量を高めていく子どもたちであった。「低学年の子どもたちの運動は総合的であることがいいね。」そう語って下さった白石先生の言葉が今も新鮮に残っている。教育の世界の中で、総合という言葉がまだあまり一般的でなかった時代のことである。

初めての一年生

農村の小さな小学校に転任し、初めて一年生を担当した。どこまでも純粋な子どもたちで、子どもたちとの毎日の生活が幸せであった。この子どもたちとの生活を欠かさず残したい。そう思って毎日欠かさず3年間学級通信を書いた。書き続けていると、知らず知らずのうちに子どもがよく観えるようになってきた。凡事徹底の大切さを思った。

給食の時間、パンを食べながら「パンは何からつくるんだあ。」と呟いた子どもがいた。農村ではあったが、麦を栽培しているのを見た子どもは一人もいなかった。『麦か、作ってみてえなあ』という子どもたちの呟きがクラスの中に沸き上がってきた。呟きを聞きながら、『子どもが動く』白石先生の体育の授業が浮かんできたと共に、なんだかすごく楽しい、嬉しい気持ちになってきた。

『麦を育ててパンを作ろう。』という活動が始まった。

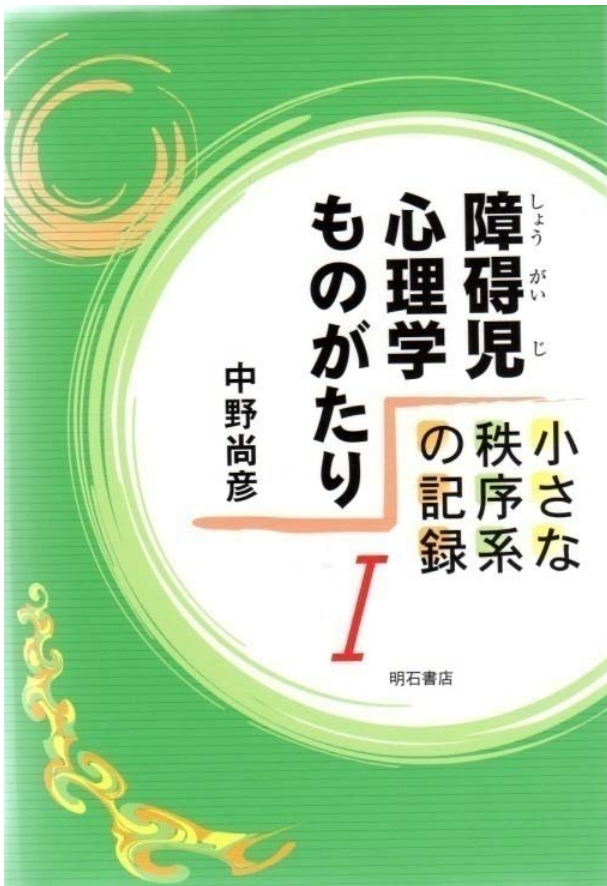
豊かな題材で次から次へと活動が広がり、充実した日々だった。それから30年余、すっかりこうした学習活動のとりこになってしまった。



書評

中野尚彦 『障害児心理学ものがたり』 小さな秩序系の記録』 明石書店、2006

中村 保和（福井大学大学院／学校教育専攻）



私が大学4年生だった丁度この時期は、障害を有する子どもとの係わり合いの経過を実践研究という形で卒業論文にまとめていた頃だった。当時の指導教官から「小説のような卒業論文を書きなさい」と言われた。当時はその意味がわからず、ただひたすらに、子どもとの間に起きた出来事を書き連ねていた。

出来上がった卒業論文を目の前にして、指導教官は、「とりあえずの合格点をあげましょう」と言ってくれて、今思えば、今の自分の仕事をあの時に強く意識し始めたように思う。

あれから随分と月日が経って本書を読み終えた時、指導教官に言われたことの意味がようやくわかった気がした。本書は、小説の中でもとりわけ推理小説のような学術書である。謎があって、推理(仮説)の筋道があって、主要な登場人物がいる・・・そうか、そういう卒業論文を書きなさいと言われたのか、と思う。

実践研究とは個の体験の確定法である。特定既存の仮説に従った実行は実践研究ではないと思う。こどもの個の体験事実を自身の体験事実として共有し、現象するその事実を確定する、実践研究とはそのようなことだと思う。そしておそらく個の体験事実の確定による実践研究は、個々の事実の確定にとどまらず、行動の系譜発生論的な知識の系として集積していくのではないかと思う。(本文より引用)

盲の赤ちゃんはなぜお座りを嫌がるのか？ お座りを受け入れた赤ちゃんには何が起きたのか？ お座りを始めた赤ちゃんには、なぜ机が必要なのか？ 机に手を伸ばした赤ちゃんには何が起きたのか？ 玉入れができるようになった子どもにはどんな理解が生まれたのか？ はめ板が難しい子どもはどんな「自分の考え」に従っていたのか？ 本書は、様々な障害を有する子どもたちが登場する。読み進めていくうちに、一見するとまとまりのない、状況との適合性に欠けるように見える子どもたちの様々な行動が、係わり手である著者の深い洞察を通して、その時々の子どもの考えにしたがった秩序ある行動であることに気付かされる。それはまさに、謎解き(仮説)の筋道である。

以前に係わったあの子どもの振る舞いもこういう意味があったのかもしれない、目の前にいる子どもの振る舞いにはこんな意味があるのだろうと、著者の体験事実を通して、読み手である自分自身の体験事実が再構成させられる。

1/10 (土) 10:30-12:00

特に講師の先生方で
関心のおありの方は
是非ご参加ください。

教職開発専攻（教職大学院）についての説明会

会場：福井大学文京キャンパス 総合研究棟I 13階 大会議室

問い合わせ先：福井大学学務部入試課 0776-27-9927

(土・日・祝日・年末年始を除く1月9日までの9:00~17:00)

1/24 (土) 10:00-12:00 入試ガイダンス

2/7 (土) 9:00~ 入学者選抜試験（第2次）

ラウンドテーブル・速報

主催：福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）

2/28 sat 13:30-17:00

専門職として学び合うコミュニティ

福井大学総合研究棟 13階 大会議室他

Session I 13:40-15:00 シンポジウム「教師が学び合う学校をつくる」

Session II 15:10-17:00 二つのワークショップ「教師の協働的な力量形成を支える」

3/1 sun 8:50-14:40

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009

福井大学総合研究棟 13階 大会議室他

●申し込み●

①氏名（ふりがな）、②所属・役職、③メールアドレス、④電話番号、⑤参加日（両日・2/28のみ・3/1のみ）、を明記の上、2009/2/14(土)までに dpdtfukui@yahoo.co.jp までお送りください。なお3/1の実践報告者を募集しています。報告下さる方は申し込みの際にお知らせください。（※第1次案内版につきプログラムの変更等があり得ます。

【編集後記】 NewsletterNo.8 では、教職大学院の拠点校・連携校の実践的な協働研究の様子に加えて、国内外の最新教育事情も盛り込んでみました。皆様方の感想等をお聞かせいただくと幸いです。（淵本幸嗣）

教職大学院 Newsletter **No.8**

2008.12.26 発行

2008.12.26 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp